

発達と非行の関連について

住田和奏

- 1 はじめに
- 2 発達と非行
- 3 発達に特性がある子どもを持つ家庭への支援
- 4 おわりに

1 はじめに

発達障害とは、生まれつきみられる脳の働き方の違いにより、幼児のうちから行動面や情緒面に特徴がある状態である¹。このように、脳の働き方という自分ではどうしようもできないことが少なからず作用して犯罪を起こしてしまう人、刑事責任能力がないという理由で無罪や減刑となって社会から批判されている人を見て、子どもの就学前や学校等で適切な支援を行うことで、このような苦しみを減らすことができるのではないかと思った。よって、子育て支援という観点に絞り発達と非行の関連、親子支援について考察する。

2 発達と非行

発達障害を持つ子どもを育てる困難として、「親にも発達に特性がある」パターンと「親には発達の特性がないが子どもの発達の特性に理解がない」パターンの二種類が多いと考える。

まず「親にも発達に特性がある」パターンについて考察する。このパターン考えられる問題として、親自身の発達の特性による就労への難しさ、不安定さにより貧困に陥りやすい点、そして発達の特性により家庭生活や子育てそのものに困難が多いことがある点の二点が主に上げられる。

マートンのアノミー理論においても、貧困層は「合法的な手段が提供されない集団」の例として挙げられる。まず、マートンのアノミー理論とは、不平等な社会構造により、アノミー、すなわち無規範状態にさらされた人々が非合法的な手段を用いて目標を達成しようとすることで犯罪行動が発生するというものである。この目標と手段の乖離とは、ある種の目標、例えば経済的な成功が非常に重視され、他方でそれらに到達する一定の合法的な手段がある集団には提供されないことである。OECD雇用労働社会政策局『特集：格差と成長』

¹ 厚生労働省「知ることからはじめよう みんなのメンタルヘルス」発達障害

2023/01/15 アクセス

https://www.mhlw.go.jp/kokoro/know/disease_develop.html

によれば、所得格差が広がると、低学歴の両親を持つ個人の人的資本は悪化し、中学歴、または高学歴の両親を持つ個人はほとんどあるいは全く影響を受けない²。このことから、格差は不利な状況に置かれている個人の教育機会と上方流動性に大きく影響し、貧困の連鎖に繋がることがわかる。この貧富の差の連鎖が発達障害をもつ人の家庭で起こりやすいと考えられ、アノミーにさらされた子どもが非合法的な手段を用いて目標を達成しようとし、犯罪行動が発生していると考えられる。

また、親自身の発達特性により子育てそのものが難しい点について、発達の特性のなかには「応用が利かない」「見通しが立たないことに不安を感じる」などがあるが、これはマニュアルがない子育てというものの難易度を上げることが多い。結果的に、子どもとのコミュニケーションが上手くいかない、学校等社会との連携が取りにくいといった状態になり、家庭の孤立を生みやすく、家庭内の問題が明るみに出にくい。そのため、子どもが犯罪行動を起こすような状態になっていたとしても、周囲がそれに気づくこと、また親が子どもに犯罪行動を起こさないよう働きかけることも難しいと考えられる。

次に、「親には発達の特性がなく子どもの発達の特性に理解がない」パターンについて考察する。このパターンで考えられる問題として、虐待に繋がりがやすい点、子どもが家庭での居場所を失う可能性が高い点の二点が考えられる。

子どもに発達の特性があった場合に虐待に繋がりがやすい理由として、親と子どもとの間で愛着関係が築きにくいという点が挙げられる。愛着とは養育者や特定のおとなとの間に生まれる情緒的な絆のことであり、親子の信頼関係を築くにあたって欠かせないものである。発達に特性がある子どもと愛着関係を築くのが難しい例として、子どもの機嫌がすぐに悪くなってしまう、そしてその理由が分かりづらいなどがあり、親が子育てに対して通常以上に疲弊してしまうということがある。このようなことから虐待に繋がる可能性が高い。少年院入院者の中で被虐待経験がある者の割合は男子で37.9%、女子で68.6%となっており、虐待と非行の因果関係は否定できない³。

子どもが家庭での居場所を失う可能性が高い点について、子どもが「親から理解してもらえない」などの理由から家にいる時間を減らそうとして深夜徘徊をする、居場所を求めて不良集団との付き合いが始まるといった非行につながる行動を起こす可能性が高まることが考えられる。

これらの子育て上の困難は、非行の素因となりうる。よって、発達に特性のある子どもの子育てを支援することは、将来的な非行の防止に繋がると考え、次章では発達に特性がある子どもを持つ家庭への支援について考察する。

² 雇用労働社会政策局『特集：格差と成長』2023/01/15 アクセス

³ 令和3年度版 法務省『犯罪白書』3-2-4-8 図 2023/01/15 アクセス
<https://www.moj.go.jp/content/001365732.pdf>

3 発達に特性がある子どもを持つ家庭への支援

発達に特性がある子どもを持つ家庭への支援で最も大切なことは、親が子どもに対する愛情を持てるように、子育てに対する気力を引き出すことであると考え、そのためには親と支援者の長期的な信頼関係が重要であると考え。

保育士等の支援者も、子どもとのかかわりの中で子どもの人格形成に大きく関わることになるが、幼少期に最も多くの時間を過ごす場所は家庭であり、最も多く触れ合う大人は親であることが多い。家庭、親が子どもに与える影響は多大であり、そこで愛情を注がれることが子どもの人格形成に大きく影響する。よって、親が子どもに愛情を注ぐことができるような気力を引き出すことが重要である。

しかし、発達に特性がある子どもや親は、一般の保育園や幼稚園、学校で思うような支援を受けられない可能性がある。児童精神科医で立命館大学社会学部教授である宮口氏は、この点について、これらの人々は支援を求めるところか支援者を遠ざけるような行動、例えば嘘をつく、約束を破る、問題行動を頻繁にする、謝らない、支援者に暴言を吐くといったことを行い、支援者の助けようとする勇気を砕いていると指摘する⁴。

このような行動をされたときに、支援者はひたむきに親子への支援を続けることは難しい。そこで問題を抱えた支援者は他の支援者に相談し、一人で解決しようとしなことが重要である。そうして負担を分散することで、長期的に発達に特性がある子どもや家庭と向き合い、時間をかけて信頼関係を築くことができる。また、支援者が一人ではないこと同様に、子どもを育てる親に対しても「一人ではない」と伝えることで、家庭内での孤立、地域での孤立を防ぎ、少しずつ支援者を頼ることができるようになる。このように長期的な信頼関係を築いたうえで、子育てに対する気力を引き出すことが、子どもの人格形成に良い影響を与えると考える。

また、保護者と長期的な信頼関係を築くことで、将来的に子どもが問題行動を起こすなど非行につながるおそれが考えられた際に、保護者が相談できる場所、安心できる場所として機能することができ、実際に非行を起こす前に子どもを止められる可能性が高くなるのではないかと考える。

4 おわりに

発達に特性がある子どもを持つ家庭の子育て上の困難が非行に繋がる原因となる可能性があること、そしてそのような家庭を支援するにあたって重要なことについて検討してきた。

私は発達障害の特性が犯罪のリスクと直接結びつくとは考えない。しかし、発達の特性によって生まれる生きづらさ、周囲の環境は、犯罪のリスクにつながると考える。犯罪が起ってから、非行少年の生育歴のどこかで支援者が介入することができなかつたのかとやる

⁴ 宮口幸治『どうしても頑張れない人たち』（新潮社、2021年）121頁

せない思いを味わうのではなく、どんな環境、特性を持って生まれた子どもも自由に、生き生きと暮らせるような支援や環境づくりを行うべきであるとする。